

魏志倭人伝(2)

山下 浩

前回の第一章に続き、魏志倭人伝の解説を進める。

第二章 女王国の歴史

原文「其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年」

訳「其の国もまた元々男子を王として七、八十年を経ていた。倭国は乱れ、何年も攻め合った。」

女王国もまた、もともと男子を王として七、八十年を経ていた。『後漢書 卷八十五』「東夷列傳第七十五」によると、桓帝・靈帝の治世の間（146～189年）和国は大いに乱れ何年も攻め合った、とある。その治世の間が43年だから、長く見積もって、靈帝の即位した168年を挟む弥生時代後期の数十年間である。「其の国もまた元々男子を王として七、八十年を経ていた」の後半の数十年は、戦乱の時代だった。「数十年」としたのは、「桓帝・靈帝の治世の間」と二人の皇帝の治世にまたがる期間戦乱が続いた、とあり、数年で片が付くような戦乱ではなかったと読めるからである。

また、『魏志倭人伝』のこの部分に和国が乱れた、と記されているということは、その当事者に女王国が含まれているということだ。女王国と関係のない、よその地方で戦乱が続いたのではないので、「和国乱」を検討するときは、それを前提にしなければならない。

またもう一つ、女王国がもともと「男子を王として七、八十年を経ていた」と書かれているので、国として体制が確立してからが七、八十年だと思われる。王の在位年数を平均二、三十年とすると、二、三代を経ていたと思われる。それ以前については触れられていないので、この文章からだけでは国の草創期はわからない。

和国が乱れた数十年間というとはほぼ四半世紀近く、中国の史書にこれ以上の記録がない以上、日本の考古学上の遺跡、遺物等に国内が大いに乱れたことを示す史料があるはずである。その検討の前に弥生時代とはどういう時代であったのか、「ウィキペディア」の「弥生時代」でその概観を見てみる。なお、この概説には私の考え方と相違する部分があるが、手を加えるとつじつまが合わなくなるのでそのまま掲載している。

【弥生時代】

「紀元前五世紀中頃に、中国大陸南方から、北部九州へと水稻耕作技術を中心とした生活体系が伝わり、九州、四国、本州に広がった。初期の水田は、佐賀県唐津市、福岡県の板付遺跡、糸島市曲り田遺跡などで水田遺跡や大陸系磨製石器、炭化米等の存在が北部九州地域に集中して発見されている。弥生時代のはじまりである。

弥生時代には農業、特に水稻農耕の採用で穀物の備蓄が可能となり、社会構造の根本は実力社会であった。即ち水稻農耕に長けた者が『族長』となり、その指揮の下で稲作が行われたのである。また、水稻耕作技術の導入により、開墾や用水の管理などに大規模な労働力が必要とされるようになり、集団の大型化が進行した。大型化した集団同士の間には、富や耕作地、水利権などをめぐって戦いが発生した。弥生時代は、縄文時代とはうってかわって、集落・地域間の戦争が頻発した時代であった。このような争いを通じた集団の統合・上下関係の進展の結果としてやがて各地に小さなクニが生まれた。」

「弥生時代は戦いの時代であり、集落の周りに濠をめぐらせた環濠集落や、低地から百メートル以上の比高差を持つような山頂部に集落を構える高地性集落などは、集落や小国家間の争いがあったことの証拠であり、また武器の傷をうけた痕跡のある人骨（受傷人骨）の存在なども、戦乱の裏付けである。北部九州から伊勢湾沿岸までには、環濠集落・高地性集落、矢尻の発達、殺傷人骨、武器の破損と修繕などの戦争に関わる可能性のある考古学事実が数多くそろっており、戦争が多かったと推定される。南九州・東海・南関東・長野・北陸・新潟は、戦争があったと考えられる考古学的事実の数が比較的少ない。北関東と東北には戦争があった可能性を示す考古学的事実はほとんどない。遠江、静岡県浜松市には環濠集落はあるが、登呂などの静岡市周辺の大規模な弥生ムラには環濠はなく、戦争があった可能性は薄い。環濠集落の北限は、太平洋側では千葉県佐倉市の弥生ムラ、日本海側では新潟県新八幡山である。」

「環濠集落には、防御と拠点という特色がみられる。断面が深くV字形に掘削された環濠や、逆茂木^{さかもぎ}と称されるような先を尖らせた杭を埋め込んでいる様子から集落の防御的性格があったことが窺える。

環濠集落は、二世紀後半から三世紀初頭には各地で消滅していく。この時期に、西日本から東海、関東にかけて政治的状況が大きく変わり、社会が安定し、そうした防御施設を必要としなくなったことを示すものとして考えられている。」

このように、弥生時代は小さな争いから大きな戦争までが繰り返される不安定な時代であったとされている。そうした時代状況の中で「倭国は乱れ、何年も攻め合った」と特筆される数十年についてこの章の最後に見ることにする。最後に見るのは、その争乱に至る過程の詳細を解明する必要があるからである。争乱の時期は二世紀中葉から後半にかけて、つまり弥生時代後期である。

弥生時代の特色として、中期に出現したものとしては、高地性集落があげられ、姿を消していくのが銅鐸である。そして、弥生時代中期に生まれ、後期には築造されなくなるものの、のちの古墳時代に大きな影響を与えるのが大規模墳丘墓である。また、銅剣、銅矛などの青銅製武器はその武器としての機能を喪失していき、宗教祭器へと変質していき、最後は地中に埋納される。これらについて検討することで弥生時代の中期から後期への複雑な歴史の流れを追ってみよう。その過程で西日本各地の遺跡を数多く紹介していく。

【高地性集落】

高地性集落は、人間が生活するには適さないとされる山地の頂上・斜面・丘陵に見つかっており、「逃げ城^{のろし}」や「狼煙台」などの軍事目的の集落であった等、その性質をめぐって様々な議論が提起されている。

高地性集落の分布は、まず、縄文、弥生前期から狩猟採集のためとみられる集落が各地に見られ、軍事目的、または戦乱から逃れるためとみられる集落が弥生中期に瀬戸内中西部と大阪湾岸に、弥生後期に近畿とその周辺部、そして瀬戸内中西部に再びみられる。古墳時代前期には、山陰の鳥取、北陸の富山・石川・新潟に分布する。

高地性集落の性質は以下のように分けられる。

- 一 狩猟採集、畑作など、生業を山に依存する人々の集落。縄文、弥生前期にも存在した。
- 二 逃げ城や狼煙台などの軍事目的の集落。大型の石鏃などの武器が見られる。
- 三 低地の集落が外敵に襲われて廃絶あるいは人口が大きく減少したあと、近くの丘陵、尾根などの高地に新たに設けられた集落。征服者からの抑圧、収奪などから逃れるためとみられ、環濠で集落を囲うものもある。
- 四 瀬戸内海の沿岸、島嶼部に見られ、航行する船舶の見張り所と思われる集落。
- 五 弥生時代後期、西日本にみられる支配者からの抑圧、収奪などから逃れるために築かれたとみられる集落。(二)との相違点は、石鏃などの武器や、戦争に備えるためと思われる施設が見られないことにある。

具体的には、香川県三豊市詫間町の紫雲出山遺跡(標高 352 メートル)、愛媛県西条市の八堂山遺跡(標高 196.5 メートル)、瀬戸内海に浮かぶ男鹿島の山頂にある兵庫県姫路市家島町大山神社遺跡(標高 210 メートル)、神戸市伯母野山遺跡(標高 130 メートル)、同県芦屋市会下山遺跡(標高 185 メートル)、同城山遺跡(標高 250 メートル)、岡山市貝殻山遺跡(標高 284 メートル)、柏原市高尾山遺跡(標高 278 メートル)などがある。(参考資料: ウィキペディア「高地性集落」)

それでは、ここにあげた遺跡について、その概略を見てみよう。

まず、香川県三豊市詫間町の紫雲出山遺跡から。

紫雲出山遺跡は、燧灘^{ひうちなだ}に突出する岬上の先端にそびえる標高 352 メートルの紫雲出山山頂にあり、絶好の視野と眺望とに恵まれている。出土遺物の種類は、普通の集落跡における一通りのものがそろっており、従って、紫雲出山遺跡は、砦・見張台・烽火台^{のろしだい}というようなもののみによって成り立っている特殊な遺跡ではなく、軍事的・防御的性格を帯びた集落遺跡と考えられる。また、畿内と密接な関係を保ちながら内海航路の監視の重要な拠点であった可能性も考えられる。この遺跡は弥生時代中期の初めごろから始まって、中期も終わりに近づくにつれて集落の規模が拡大し、人口も増加したらしいが、中期をもつ

て終わっている。そして、本遺跡の東南約二キロメートルの低地に船越集落ができています。集落の性質としては、当初は（一）、それに（二）、（四）が加わったのだろう。

弥生時代前期の打製石鏃は斉一性を持ち、九州から伊勢湾沿岸までの各地域で共通した形式であり、狩猟用のものが絶対多数を占めている。紫雲出山遺跡ではこの形式の石鏃は弥生時代中期はじめに出現した。弥生時代中期の打製石器は、西日本では大型の対人用の、すなわち、武器として使用するものが多数を占めるようになるが、この遺跡では大型のものは中期中葉に出現し、中期後半には打製石器の大多数を占めるようになった。この間、侵略者との軋轢が続いていたのだろう。（参考資料：ウィキペディア「紫雲出山遺跡」）

八堂山遺跡

愛媛県西条市の八堂山遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代初頭まで何世紀も続く高地性集落である。当然のことながら、時代の推移によって集落の果たした役割、人々の暮らしは変化していったものと考えられる。

八堂山遺跡のある八堂山山頂からの見晴らしは極めて良好である。北に西条、西に周^{しゅうそう}桑の両平野を俯瞰し、まさに道前平野（二つの平野を合わせて道前平野という）を東から一望のもとに眺め得る好所である。更に平野の遠方には、燧灘が広がり、天候次第では弥生時代の高地性集落が多数分布する芸予の島嶼部を遠望することも容易である。調査の結果、弥生時代の住居跡三棟と集石特殊遺構、円形状柱穴特殊遺構（円形倉庫）及び配石遺構が検出された。遺物としては、弥生土器（壺・甕・鉢・高坏・コップ形土器など）、平安時代末～鎌倉時代初頭（12世紀前後）であるとみられる土鍋・皿などの土師器、石鏃・石包丁・台石などの石器、刀子などの鉄器、それに桃の種、しい科植物種子などの炭化物などが発掘されている。（参考資料：八堂山遺跡Ⅱ 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター）

八堂山遺跡は一時期に設けられた住居などが少なく、外敵の脅威から逃れて築かれた集落というよりは、見張りや通信的機能を有する烽台的なものに利用したとみるべきで、集落の性質は（四）が当てはまる。（参考資料：<http://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/68/view/8528>）

大山神社遺跡

兵庫県飾磨郡家島町にある大山神社遺跡は、家島町男鹿島、標高 210 メートルの山頂部に立地している。

この島の頂上部に大山神社があり、その境内一体が遺跡であるが、遺跡からは播磨平野が一望でき、遠く淡路島・四国を眺めることができる。

この遺跡からはナイフ形石器が出土していることから、旧石器時代からすでにこの地に人の痕跡がある。そして、弥生時代中期後半になると、高地性集落が営まれ、弥生土器や農具、狩猟具、漁撈具などが出土した。その後、中世には池跡などが見つかり、瀬戸内海を往来した物資である中国製の青磁碗や畿内産の瓦器碗などが出土している。この集落は、最大 10 棟程度の住居があったと考えられ、竪穴住居や掘立柱建物、土坑などと共に弥生土器・製塩土器、戦闘用の石鏃、農耕具としての石包丁・石斧・楔形石器、漁労具としての石錘・土錘などが出土しており、麓の村と連携して村が存立していたことがうかがえる。鉄製品も鉄滓・板状鉄器など十数点出土しているが、残念ながら時期は明確でない。

播磨灘の中央に浮かぶこの島がちょうど九州から瀬戸内海を通過して畿内に入る入り口にあり、360 度瀬戸内海を見渡せる眺望の良さが遺跡を形成した要因の一つであると考えられる。瀬戸内で何か変化があればすぐわかり、また、この地で狼煙を上げれば、直ちに四方に連絡がつく要衝の地である。戦乱の弥生時代中期から古墳時代を経て大和が国造りを進めていく過程、さらにはその後も瀬戸内の海運の要衝の地として重要な役割を演じただろう。遺跡の性質は（二）とともに（四）を兼ねたものだったのであろう。戦乱終息後は（二）の性質は喪失した。（参考資料：大山神社遺跡 兵庫県家島町教育委員会・岡山理科大学人類学研究室）

伯母野山遺跡

神戸市灘区篠原の伯母野山遺跡は、まれにみる遺物の種類の多い遺跡だったといわれるが、学術的な計画調査というものをほとんど行うことなく、土取作業のために多くが失われてしまった。

伯母野山遺跡には縄文文化の遺物をごく少量認めることができるが、その遺跡や遺構についてくわしいことはわからない。といってもこれらのものが二次的に混入されたものとは地形上全然考えられな

い。弥生文化については土器が示すように、他の高地性遺跡とほぼ似て中期に属するものから後期に属するものまでが見られ、そのほかまれに土師器・須恵器の時代のものも採集された。これらのことから中期中頃にはじめて集落として拓かれ、それから200年前後、中期後半から後期全般が最盛期で、後期後半も末期に近づくにつれて縮小していったと考えられる。また後期古墳時代前後にも、再度当地にわずかな住居があったと思われるが、詳しいことは明らかではない。遺跡の性質は、遺物の多くが失われたため、分類できないが、時代の経過により(二)～(五)の性質を兼ねたものだったのでなかろうか。(参考資料：神戸市文化財報告6 伯母野山彌生遺跡 神戸市難区篠原高地性遺跡出土遺物概況 神戸市教育委員会)

えげのやま 会下山遺跡

会下山遺跡は、兵庫県芦屋市内の北方から南に傾斜する六甲山堤の西半分にある弥生時代中期から後期の高地性集落遺跡である。山頂部に祭祀場二カ所、次いで首長住居と柵跡が尾根上部にならび、一般住居と区別されていた。住居跡は七カ所、いずれも二度以上建て替えられている。他に火たき場跡(のろし台とも考えられる)、廃棄場跡、泉跡、土壇墓四基などが遺存していた。漢式三翼鏃、銅鏃、大型逆刺鉄鏃、鍛造鉄斧、鉄鑿、槍^{のみ} 鉋^{やりがんな} 六点、鉄鏃八点、鉄釣針など鉄器が多く、青いガラス小玉一四点が出土した。軍事的色彩の濃い遺跡である。遺跡の性質は(二)、(五)であろう。(参考資料：会下山遺跡 芦屋市文化財調査報告3)

貝殻山遺跡

岡山市の貝殻山遺跡は児島半島の北東端にある。当時ここは島であった。弥生時代中期に出現し六棟の竪穴式住居跡と貝塚、分銅形土製品などが発見されている。この地点は倉敷市にある大型墳丘墓の楯築遺跡からみて冬至の日の出の昇る方角であり、しかも見通すことができる。瀬戸内海は180度開け南には四国が見える。児島を取り巻く海は重要な航路だった。海を行き交う舟や人々を見張る役割があったのではないかと考えられている。遺跡の性質は(四)であろう。

(参考資料：

<http://kibi33.com/kibi/2008/02/20/%E8%B2%9D%E6%AE%BB%E5%B1%B1%E9%81%BA%E8%B7%A1%EF%BC%88-%E9%AB%98%E5%9C%B0%E6%80%A7%E9%9B%86%E8%90%BD-%EF%BC%89/>)

高尾山遺跡

高尾山は生駒山地の最南端付近にあり、標高は278メートルと低いながらも岩峰がそびえている。高尾山遺跡は、弥生時代後期から古墳時代初期のものとされ、比較的豊かな集落であり、防衛上の都合でできたものと考えられているが、発掘されていないため詳細はわかっていない。集落の性質としては、(二)が当てはまる。

大正一四年に弥生時代のものとされる『多紐細文鏡』が山頂南のぶどう畑の開墾中に見つかっている。朝鮮半島の青銅器時代に盛んに製作された鏡で、日本では8面しか発見されていない貴重なものとされ、現在は東京国立博物館に保管されている。(参考資料：ウィキペディア「高尾山(大阪府)」)

このように、高地性集落は弥生時代中期、後期、それ以後の時代と、時代によりその性質、役割を変えながら存続、あるいは廃れていった。

九州の戦い

高地性集落は北部九州には見られない。そして軍事目的とみられる高地性集落(二)は、瀬戸内海西部の周防国に現れた後、瀬戸内海中部、大阪湾岸へと時代を追って発生していく。それは、九州の大国が瀬戸内海を東上し、侵略していったことを示している。その大国とはどこか。じつは『魏志倭人伝』に書かれているまつら国、いと国、な国など北部九州の国々ではない。北部九州は「北部九州以外の九州のある大国」に征服されていた。

しかし、それはおかしいと思われるかもしれない。第一章で北部九州のまつら国、いと国、な国などの遺跡について紹介したが、どれもひじょうに豊かな品々が発掘されており、そうした豊かな国々がむざむざ、短期間に侵略されたとは考えづらい。そうではなくて、それら豊かな国々が争い、勝ち抜いた国を中心に北部九州が統一国家を形成して瀬戸内へと軍事侵攻したと考えるほうが現実的だ。そう、北部九

州には確かに統一国家が存在した。あとで詳しく書くが、「奴国」である。しかし、北部九州が侵略されたことは、西暦 57 年に後漢から奴国に下賜された金印が奴国から離れた志賀島で発見されていることや、北部九州の王墓とされる遺跡が弥生時代中期までしかなく、それ以後のものとするのは、卑弥呼の時代王がいた伊都国の平原遺跡くらいしかないことから窺える。弥生時代中期をもって北部九州には伊都国以外で王墓はなくなった。

どこが侵攻し、征服したのか。それは、古くからの言い伝えをもとにまとめられた『古事記』、『日本書紀』の神武東征の筋書きの通りで、『日本書紀』に「^{にぎのみこと}邇邇芸命が^{くしふるだけ}竺紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降りまさしめき」と記述された、現在の日向を中心とする南九州の国である。

弥生時代の歴史研究の真最中、こんなところで突然日本神話を持ち出したので驚かれたのではなからうか。日本神話は高天原だの天照大神だの^{すさのおのみこと}素戔嗚尊だの、架空の神々が登場するしよせん作り話ではないか、と思われるかもしれないが、それはしごく当然である。しかし、フィクションにはその元となったモチーフが背後に隠されているものだ。天孫降臨の地が日向の国とされたのには根拠があるはずである。自分たちの父祖の地を根拠もなく「日向」と定めることこそおかしなことで、実際に日向で発祥したから日本神話に記載したと考えるべきだ。

つまり、戦争があった可能性を示す考古学事実がほとんどなく、環濠集落の見られない南九州で発祥した武力に秀でた国が北上し、豊かな農地の広がる北部九州に侵入、比較的短期間に征服したのだ。南九州は北部九州に比べて山地が多く、農地に適した平地が少ない。また、火山性噴出物のシラスの分布地域が鹿児島、熊本、宮崎と広がっており、水はけが良すぎるために稲作には不向きなうえに栄養分も乏しく、シラス台地の農業生産性は低かった。そうはいつても、シラス台地の周辺部には湧水地が多く、現在では 3,250 カ所の湧水地が確認されている。そうした低地では弥生時代から稲作が行われており、遺跡も多く見つかっている。しかし、水源の乏しいシラス台地の上は中世に至るまで開発が進まなかった。豊かな農地が広がる北部九州の光景を見た貧しい国の王には、この豊かな国々を支配したくなる動機が十分にあっただろう。(参考資料: ウィキペディア「シラス台地」)

日向国

それでは、北部九州を征服したとみられる日向の国とはどんな国だったのか、詳しく見てみよう。

古代の「日向国」は七世紀中期以降、律令制の成立に伴って成立した。成立当初は現在の宮崎県と鹿児島県の九州本土部分を含む広域に渡っていた。現在の常識である「日向の国＝宮崎県の領域」という常識は古代では成立しない。大宝 2 (702) 年の薩摩・多岐叛乱を契機に、現在の鹿児島県部分の西部が^{はやひと}唱更国(後の薩摩国)として分立し、その後、和銅 6 (713) 年に^{たね}肝杯郡、^{きもつき}贈於郡、^{そお}大隅郡、^{あいら}始羅郡(現代の始良郡とは別)の 4 郡が大隅国として分立し、現在我々が思っている領域の「日向の国」となった。『古事記』、『日本書紀』が編纂された当時、日向の領域がどのように認識されていたか不明であるが、『古事記』の完成が 712 年で大隅国の分離前であり、南九州の広い領域だと認識されていた可能性がきわめて高い。つまり、現在の「日向」の認識と古代の「日向」の認識は違ったものであり、古代の「日向」は島嶼部を除く南九州全域を指していた。この認識の下で『古事記』、『日本書紀』は書かれている。「日向」を南九州の僻地の小国としてではなく、それなりの力を備えた、全国統一をなす国家として描いている。北部九州を侵略した国は南九州を広く統一し、支配していたのだ。(参考資料: ウィキペディア「日向国」)

当時の日向国がどのような状態だったのか、一例として宮崎県都城市の遺跡の状況を見てみよう。

約 2000 年前、大淀川の支流沿いに多数の集落(加治屋 B 遺跡・坂元 B 遺跡・平田遺跡・今房遺跡・向原遺跡・前畑遺跡など)が誕生した。それらの集落跡からは、南九州系(大隅半島)、東九州系(豊後地方・宮崎平野部)、中九州系(肥後地方の重弧文器台)といった各地域の土器が混在して出土しており、日向灘を隔てた瀬戸内地方の土器も見つかっている。このことは、当地域が東南部九州の内陸部という地理的環境によって、各地域の文化や人々が集まる結節点となっていたことを物語っており、南九州に統一国家が存在し、活発な交流が行われていた可能性を示している。統一されていたとして、その時期はいつかという、北部九州侵略の直前とか二、三年前とか、そういった時期ではなく、九州南部統一のあと、統治機構を整備し九州南部の交易の自由化を行い、戦争の準備と遂行に支障のない状態の構築を行うのに必要な期間、おそらく数十年以上前ではなからうか。時期的には一世紀始めか中頃、だいたい奴国が後漢に朝貢したころだろう。そうであれば、この統一国家は大規模な戦争遂行に耐えられる軍事力を

保持していたのではないかと考えられる。また、これらの遺跡の中には、縄文時代早期から近世まで続いたものがあり、戦争などで廃絶したり、廃れたと思われるものがない。この地方では大きな戦争があったという様子がないのである。(参考資料：<http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/display.php?cont=121011150551>)

個別に見てみよう。

加治屋B遺跡

加治屋B遺跡は、圃場整備事業に伴い発掘調査が実施され、縄文時代早期から近世までの遺構・遺物が確認された。

その中で最も注目されるのが鎌倉時代の在地領主館跡で、南北約 140 メートル、東西約 140 メートルの大規模な館跡で、敷地内からは古代の掘立柱建物跡九六棟や竪穴状遺構四基、墓跡などが確認された。

(参考資料：<http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/display.php?cont=120919103604>)

坂元A遺跡・坂元B遺跡

坂元A遺跡では縄文時代の終わり頃から中世までの水田跡が発見され、九州南部における最も古い水田の形を知ることができるほか、各時代の水田の移り変わりを観察することができる貴重な遺跡となっている。

坂元B遺跡では弥生時代の竪穴住居を中心に縄文時代から近世までの遺構・遺物が確認された。特に弥生時代後期の竪穴住居(花弁形住居)からは完全な形の土器などが多数みつき、儀礼に関するものと考えられている。(参考資料：<http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/display.php?cont=120919110145>)

平田遺跡は縄文時代から中世にかけての遺跡だが、中心となるのは、集落跡が見つかった弥生時代である。弥生時代の集落跡からは竪穴住居や掘立柱建物、周溝状遺構など多くの遺構が確認された。また、周溝状遺構の内部より、炭化米が大量に出土している。

(参考資料：<http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/display.php?cont=120919111120>)

むこうぼる

向原遺跡

むこうぼる

向原遺跡は、都城盆地底に展開する一万城扇状地のほぼ中央、都城市と三股町の境に広がっている遺跡である。

向原第一遺跡、第二遺跡ともに、住居・土坑・溝などからなる弥生時代中期から後期の集落遺跡であり、谷に面した扇状地面の端部に形成されている。

特筆すべき遺構としては、第一遺跡三号住居跡が上げられる。この住居からは台石や砥石が出土し、床には焼けた小さな鉄片が散乱していた。弥生時代、南九州では例の少ない鍛冶工房跡と考えられている。

(参考資料：<http://cms.city.miyakonojo.miyazaki.jp/display.php?cont=120912132711>)

しもきたかたつかぼる

これらのほか、宮崎市の下北方塚原第三遺跡も縄文時代から江戸時代に至る遺跡である。

(参考資料：<http://www.city.miyazaki.miyazaki.jp/culture/history/2195.html>)

このように、九州南部は今でいう「日向国」を中心に広く統一され、九州の東部、中部、南部との活発な経済交流が行われていたが、農業生産性は高くなく、北部九州と比べると社会は貧しかった。銅剣や銅矛などの青銅器や玉類、甕棺墓などの発掘はほとんどなく、北部九州とは文化、宗教においても異なる社会だった。また、弥生時代後期になっても九州南部にはそうした遺物が見られないので、北部九州征服後も征服軍は九州南部に凱旋せず、そのまま北部九州にとどまり、戦後統治を行ったとみられる。宮崎県と鹿児島県のほぼ中間に位置する小林市は古くは「夷守」と呼ばれており、市内には細野夷守の地名があり、南西には夷守岳がある。このあたりに官と鄙守を置いて南九州を統治したのだろう。また、市の南に霧島連山の「高千穂峰」があり、『日本書紀』などに書かれている天孫降臨の地かどうか断定は憚れるが、北部九州を征服した南九州勢の発祥の地はこの辺りではなかったかと考えられる。九州南部は北部九州の宝物、祭器、税としての米穀などがもたらされることがなく、戦後も経済的に貧しいままだったのである。それ以降も大きな戦争がなかったため、自然災害などの合理的理由なしに集落が廃絶することがなく、何世紀にもわたって同じ場所に集落が営まれた。

北部九州と周辺諸国の関係

南九州と北部九州は、阿蘇山、九重山をはじめとする九州中部の山々が立ちはだかり、特に日向周辺と北九州とでは陸路の交流は困難だったろうと思われる。海路は、東回りは豊後水道と関門海峡が行く手を阻み、西回りは九州南端の大隅半島と鹿児島半島、西端の長崎を迂回して回り込まなければならない。そのため、経済的結びつきは弱く、人々の交流が活発でなかったため、南九州の軍勢が海路北上して侵攻するかもしれない、という情報の取得は極めて困難だったろうと思われる。

この考えに反対する人もいるだろうから、考え方を変えて、北部九州の国が九州を統一した、と考えたらどうだろうか。

北部九州を統一していた国、奴国は、農業生産力だけでなく、大陸との交易や海路を通じた全国各地との交易も行っており、武力によって貧しい南九州などを攻め、国土の拡大を図る必要がなかった。周囲の国々が農地を荒したり、収穫物を略奪したりして国の安定・安全が侵されない限り、対外戦争を行う必要がなかった。南九州とは阿蘇山などの山々に遮られ、陸路での略奪などは起こらなかったため、特別な警戒は行わなかった。武力侵攻により得られるものより、外交関係を安定させ、経済活動を盛んにするほうが利益が大きいのだ。

この時期の政治情勢を見ると、弥生時代中期は、それまでの小さな国々がより強い国に地域ごとに統合され、山や川など自然の境界によって中規模な国々が鼎立していき、各地の首長の勢力関係が安定して平和が保たれていたとみられる。各国々の間で、東海地方沿岸、日本海、瀬戸内海の沿岸や、島嶼部をたどり、また、奄美・沖縄方面へと、船舶による活発な経済活動が行われていた。これは、各地の遺跡から発掘される遺物が、全国各地からもたらされていることから言えることである。南九州からはこうした舶載品はほとんど見られない。また、南九州には北部九州の甕棺墓が見られないなど、文化の流入の痕跡がない。もしも北部九州に征服されたのなら、北部九州の宗教、文化などの影響を受けるはずであるが、ほとんど見られない。つまり、奴国にとって、地理的な一体性がない九州南部などの貧しい国々を武力で攻めて支配下に置いてもしかたがない、という状況だった。

奴国周辺には、南九州の勢力以外に、中国地方西部、今の山口県の国々、四国の国々、海を渡って対馬国、朝鮮半島の国々があり、そうした国々の侵攻の可能性も考えられるので、その可能性を一応検討してみる。

今の山口県の国々とは、関門海峡を、四国の国々とは豊後水道を越えて互いに活発な交流があったはずなので、情報も迅速に伝わっており、互いの国力を理解しあえる状態だった。そうした状況で不意の侵攻を図ることは難しかろう。また、海を隔てているので、水争いや、境界をめぐる争いとも縁がなく、良好な関係が築かれていただろう。

対馬国や壱岐国は、先ほどもみたように、農業生産力が弱く、漁業を主産業にする貧しい国だった。彼らは、穀物などの農産品の不足分を得るためには、九州、朝鮮半島との良好な交易関係を維持しなければならなかった。そして、海峡を渡る航海術には長けていただろうが、大量の武器を調べ、他国に侵入するほどの経済力、軍事力はなかったし、『魏志倭人伝』に対馬が千余戸、壱岐が三千ばかり許とあり、一番肝心な人口そのものが少なく、兵士の十分な動員が不可能だった。当時、対馬国や壱岐国は対馬海峡を巡る勢力図から奴国に支配されていたとみられるが、このことについては、後ほど述べる。

朝鮮半島諸国は、古来から北方諸民族、大国中国の度重なる侵攻を受けており、国土の防衛と近隣諸国との攻防に精力を消耗していた。国防に兵力を割いたうえで、海外派兵を図る余力がある国があるとは考えられないし、逆に狗邪韓国のように和人が支配する国があった。また、北方からの強力な圧力に屈して、一つの国が海へと逃げ出し、北部九州に武装難民のように押し寄せ征服した、ということも、考古学的事実としては見られない。これに関し、江上波夫の騎馬民族征服王朝説がある。これは四世紀始めを舞台としており、大陸東北部に半農の騎馬民族が発生し、そのうち南下した一部がいわゆる高句麗となり、さらにその一部が夫余となり、その一部が、対馬・壱岐を経由して九州北部を征服し、任那と併せて「倭韓連合王国」的な国家を形作り、さらに五世紀初めころに畿内の大阪平野に進出し、そこで数代勢威をふるい巨大古墳を造営し、その権威をもって、大和国にいた豪族との合作によって大和朝廷を成立した、としている。この理論は私の仮説と時代が合わず、マッチングしない。(参考資料：ウィキペディア「騎馬民族征服王朝説」)

こうした周辺諸国の情勢を見ると、北部九州は南九州勢の侵攻を受けて征服されたと判断することが合理的である。

この考え方を補強するために参考になるのが、規模が大きく遺跡・遺物が豊富な九州北部、佐賀県にある吉野ヶ里遺跡である。

【吉野ヶ里遺跡】

吉野ヶ里遺跡は、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町と神埼市にまたがる吉野ヶ里丘陵にある遺跡で、国の特別史跡に指定されている。

およそ 50 ヘクタールにわたって残る弥生時代の大規模な環濠集落跡で知られる。吉野ヶ里遺跡の最大の特徴とされるのが集落の防御に関連した遺構である。弥生時代後期には外壕と内壕の二重の環濠ができ、V字型に深く掘られた総延長約 2.5 キロメートルの外壕が囲んでいる範囲は約 40 ヘクタールにもなる。壕の内外には木柵、土塁、逆茂木といった敵の侵入を防ぐ柵が施されていた。また、見張りや威嚇のための物見櫓が環濠内に複数置かれていた。大きな外壕の中に内壕が二つあり、その中に建物がまとも立って立られている。北の集落は北内郭、南の集落は南内郭と命名されている。

多数の遺体がまとも埋葬された甕棺、石棺、土坑墓は、住民や兵士などの一般の人の共同墓地だと考えられている。発掘された甕棺の中の人骨には、怪我をしたり矢じりが刺さったままのもの、首から上が無いものなどがあり、戦いのすさまじさが見てとれる。

これらの傷ついた人骨は、いつ頃、甕棺に納められたかによって、おおよその年代が推定でき、甕棺からの編年によると、弥生中期の紀元前 100～紀元 100 年あたりとされている。この戦いの相手は南九州勢ではなく、おそらく、それより以前の、北部九州がほぼ統一されていた時期の戦争相手国、つまり北部九州を統一した奴国ではないか。理由は、遺体が甕棺に納められていることである。南九州には甕棺墓は見られない。甕棺墓は南九州勢の北部九州征服後急速に廃れていくので、甕棺墓に鄭重に葬られているということは、戦争の相手国側にも甕棺墓に死者を納めるという埋葬儀礼があったか、吉野ヶ里がその戦争に勝利したかのどちらかを示しているからである。

弥生時代中期、吉野ヶ里は侵略され征服されたと思われる。しかし、集落を囲む環濠は埋め戻されることなくその後も利用された。戦争に敗れたとはいえ、周辺諸国に比べて北部九州の農業生産力は優れており、凶作によって飢饉が発生し、飢えた人々が襲撃してくる事態や、日照りが続いた時の水争いなど、治安が不安定になったときに備え、吉野ヶ里などの集落は常日頃から非常事態に備える必要があった。また、大規模な集落は、その地域の政治の中心であり、反乱が起これば襲撃の対象となる。そのため、弥生時代後期まで環濠の整備が欠かせなかった。農業生産力が上がればその農地の収穫物で養える人口が増加するので、集落の人口も増加していった。そのため、吉野ヶ里の面積は年とともに広がっていった。同時に集落を囲む環濠もより外側へと移っていった。その結果、「弥生時代後期には外壕と内壕の二重の環濠ができ、V字型に深く掘られた総延長約 2.5 キロメートルの外壕が囲んでいる範囲は約 40 ヘクタールにもなる。」となった。(参考資料：ウィキペディア「吉野ヶ里遺跡」)

北部九州が外部勢力に侵略されたことを示す史料として、ここでもう一度、北部九州で発見された遺物、漢委奴国王印が発見されたときの状況を見てみよう。

奴国の金印

後漢の光武帝が建武中元 2 (紀元 57) 年に奴国からの朝賀使へ冊封のしるしとして賜った印が漢委奴国王印に相当するとされている。金印の出土地は、筑前国那珂郡志賀島村東南部 (現福岡県福岡市東区志賀島) と推定されている。江戸時代天明年間 (天明 4 年)、水田の耕作中に甚兵衛という地元の百姓が偶然発見したとされる。それも「一巨石の下に三石周囲して匣^{はこ}の形をした中に存した」という。すなわち金印は単に土に埋もれていたのではなく、巨石の下に隠されていた。(参考資料：ウィキペディア「漢委奴国王印」)

金印は奴国が後漢の光武帝から賜ったもので、奴国の宝物の一つであったはずである。発見された状況に未確定なことが多いけれども、それが巨石の下に隠された状態で発見された、ということはほぼ間違いなさだろう。長い間土中に埋もれていたにもかかわらず、柔らかい金属の金でできているにもかかわらず金印が目立った傷が見当たらないからである。奴国は戦争に敗れ、奴国から離れた当時は島だった志賀島まで逃れてきて、おそらく船で大陸へ渡ろうとしたのだろうが願い叶わず、退路を断たれてやむなく、宝物を敵に奪われないよう巨石の下に隠匿し、最後の戦いに挑んだのだろう。近隣の国に敗れた

のなら、近隣諸国には奴国が金印を所蔵していることが知られていただろうから、関係者への拷問なり、周辺の調査なりで探索されただろうが、それを知らない遠隔地からの侵略なら、関係者の死亡や拘束により、埋蔵されたままになったであろう。文字通りの「埋蔵金」である。奴国は北部九州以外の外部勢力に敗れた。

奴国が滅びたことや、いくつもの状況証拠から、南九州発祥の国が九州北部を征服したと私は考えている。時期は、「建武中元 2 (57) 年後漢の光武帝に奴国が使して、光武帝により、奴国が冊封され金印を授与された」という奴国の記録から、紀元 57 年よりも後である。そして、紀元 107 年に後漢に帥升すいしょうという王が生口 160 人を献じ、安帝に謁見を請うた、と後漢書東夷伝にあり(注 原文は「安帝永初元年倭國王帥升等獻生口百六十人 願請見」)、私の推測であるが、北部九州を征服した国の王、帥升(後漢に対して名乗った中国風の名前であり、和国での本当の名前は不明)が後漢との交易、冊封関係の継承を図り、さらには奴国が後漢から受けていたと思われる朝鮮半島南部の鉄の採掘などの権益を引き継ごうとしたのではないか。であれば、紀元 57 年から 107 年までの 50 年の間、もっと絞れば、107 年よりも二、三年前、105 年ごろに帥升が率いる南九州発祥の国が九州北部を征服したことになる。「後漢に生口 160 人を献じた」とあるが、生口の人数が非常に多い。戦争で多くの兵士や旧王族が捕虜になっていたのだろう。これほど多くの囚われ人を船に乗せ、大陸へ護送するのは大変な労苦があったのではないか。なお、その国名であるが、『翰苑』「蕃夷部」「倭国」の条には「倭面上國」、北宋版『通典』には「倭面土國」、『唐類函』の「百十六卷」の「邊塞部一」の「倭」の条には「倭國土地王」などとあり、後漢書東夷伝の当初の記載がどうであったのか不明である。そのため、どれが正しいのか、また、その正しい読み方もわからない。(参考資料: ウィキペディア「帥升」)

奴国は後漢の光武帝から金印を賜っていた。漢の印綬制度では印の材質では上から順に玉・金・銀・銅で、綬(官職を表す印を身につけるのに用いた組紐)の色は多色(皇帝で六色)、緌れい(萌黄)、紫、青、黒、黄となる。漢代で諸侯王は内臣の場合は金璽緌綬が授けられるが、外臣で王号を持つ者は金印紫綬となる。奴国王が賜ったのは銀印や銅印ではなく金印紫綬である。ということは、奴国王は後漢から和国を代表する王と認知されていたということができ、九州北部の諸国をほぼ統一していたのではないか。小国が併存している状態の北部九州の一国に金印紫綬を授けることはない。授けるとしたら銀印か銅印である。当時、朝鮮半島の小さな国々が後漢や魏など中国の王朝から印を下賜されているが、ほとんどが銅印である。また、時代は後世になるが、琉球王国は明から銀印(鍍金銀印)を下賜されていた(1383 年)。いと国のように『魏志倭人伝』の書かれた三世紀に王がいる国があったけれども、九州北部は奴国が最大の勢力で、統一国家に近い状態になっていたのではないか。吉野ヶ里の集落を征服したのは「奴国」であり、北部九州の穀倉地帯を征服し、広く領土としていた。その北部九州の最大勢力も南九州からの侵略者に敗れたのだ。(参考資料: ウィキペディア「印綬」)

奴国を破った帥升が治める国が後漢から印綬を賜ったという記載がない。後漢にとってその国は冊封していた属国の奴国を滅ぼした、いわば敵国にあたる国で、領地を広げつつある新興勢力の一つでしかなかったのだろう。

奴国について

それでは、滅ぼされた奴国とはどのような国だったのだろう。史料としては『後漢書』東夷伝の「金印を賜った」という記事しかないが、この一文だけで北部九州を支配する大国だったことがわかる。また、地理的にも、北部九州は朝鮮半島・大陸との窓口であり、奴国は、半島南部の鉄の独占的な輸入とそれを和国各地へ流通させることによって大きな利益を得ていたのだろう。後で述べるが、女王国が伊都国いちだいつに一大率を置いて、大陸との交易を一元的に管理していた事実からも、奴国も同様の体制を取っていたことが考えられる。また、朝鮮半島との交易の一元的な支配のためには、朝鮮半島との交易の中継地である対馬、壱岐の支配は不可欠であり、これらの島々も領国としていただろう。それらを考えると、奴国は、朝鮮半島南部から対馬海峡、北部九州一円を広く支配していたと考えられるのだ。

狗邪韓国のところで見たとように、『三国志』魏書弁辰伝には、辰韓と弁韓は鉄の産地であり、韓人、濊人、倭人などが採掘していた、と書かれている。採掘された鉄は鉄器に加工されて和国に輸出されていた。この時代の和国では製鉄が行われておらず、弥生時代後期後半頃になってカラカミ遺跡(壱岐市)や小丸遺跡(広島県三原市、時期は三世紀と思われる)で開始され、それから時代が下り出雲地方や吉備で

も製鉄が行われるようになった。鉄は銅と比べて強くて丈夫なので、武器としてだけでなく、農具、工具としても重宝され、稲作にも多大な影響を与えた。こうした、先端の農業器具の導入や、沖縄などの南方を始め、瀬戸内、山陰、東国などとの海路を通じた活発な交易により、奴国は和国で最も豊かな国になっていたのだろう。(参考資料：ウィキペディア「鉄」)

九州統一から東征の開始

帥升は北部九州を制圧し、ほぼ九州一円の支配者となった。

普通に考えれば、大陸との玄関口となる場所に都を設け、そこを拠点に中国、朝鮮半島、周辺諸国との交易の拡大を図り、権力の強化、国力の充実に努めるのではなかろうか。ところが、歴史の現実を見ると、瀬戸内海沿岸に西部から東部へと時代を追って高地性集落が築かれていくのである。また、弥生時代中期以降、北部九州には王墓とみられる遺跡がほとんど造られず、都も設けられた様子がない。それでは日向に凱旋したのかということ、そのような遺跡もない。帥升らは東征に旅立ったのだ。ではその動機は何だったのだろう。九州勢の東進に対応する『古事記』の神武東征の理由が、「神倭伊波礼毘古命かむやまといわれびこ(=神武天皇)は、兄の五瀬命いつせのみこととともに、日向の高千穂で、葦原中国を治めるにはどこへ行くのが適当か相談し、東へ行くことにした。」となっており、『日本書紀』では「神日本磐余彦天皇かむやまといわれびこは四五歳の時、天祖瓊瓊杵尊にぎのみことが天降って一七九万二四七〇余年になるが、遠くの地では争い事が多く、塩土老翁しおつのおじによれば東に美しい国があるそうだから、そこへ行って都を作りたいと言って、東征に出た。」としており、近畿地方中央部を目指して遠征に出ている。つまり、帥升の九州制圧は最終目標でなく、全国を征服するための前段でしかなかったことになる。だから北部九州に都を設けず、王やその一族込みで東征に出たのだと言えるのだが、始めからそのような野望をもって九州を統一したとは、どうも思えない。残念ながら、史料が全くないので論証可能な仮説を立てることはできないが、自分なりの考えを述べよう。問題点も多く、ご批判は甘んじてお受けする。

九州全土を掌握した帥升が率いる国は、征服した国々(注 『魏志倭人伝』の「国」は王が支配する国家の意味でなく、つま国、とま国のように集落、経済的・政治的結びつきのある地方の意味で使われている。私もその意味で「国々」と表現する)を統治下に置いたうえでその統治機構を整え、敗れた国々の軍を配下に加えてさらに力を蓄えた。しかし、この侵略は、弥生時代前期から始まった力の勝る国が周辺の国々を統合していく長い戦争の時代を経て、弥生時代中期になってようやく築かれた、地域ごとに中規模な国家が共存していた和国の平和と諸国間の秩序、安寧を根底から覆すものだった。特に、奴国は北部九州、対馬海峡一円を領土とする大国であり、諸国間の秩序を守る要であった。奴国滅亡は和国の国家間のパワーバランスの崩壊を意味した。そのため、中国、四国の国々に強い不信感を醸成させ、新たな軋轢を生んだ。それまで奴国は、周辺諸国と安定した外交、経済関係を築いていたが、南九州勢に敗れ、滅びてしまった。それまでの安定した外交関係を保っていた国が侵略され、滅びたために周辺諸国は九州の新しい王との外交関係の構築に二の足を踏んだ。治安への不安から民間レベルでの交流も細ってしまい、それまでの輸入品が入りにくくなり、九州の特産品の輸出も困難になった。(すべてにおいて証拠はない。推測である。)

この時期の北九州の交易の状況をインターネットの「弥生ミュージアム 第五章 4 交易・租税」で見よう。

「弥生時代前期末から中期初頭にかけての時期、北部九州地方では福岡県の今山産(注 福岡市西区 今山遺跡)の石斧と立岩産(注 飯塚市 立岩遺跡)の石包丁が、東は豊前、西は佐賀平野、南は熊本県の宇土半島まで、広く一円に流通する状況が出現します。」

「紀元前 108 年に中国の前漢王朝が朝鮮半島に出先機関である楽浪郡を置きます。このことに関連するのか、それまで朝鮮半島製が主だった北部九州地方の墳墓の副葬品にこの頃より中国大陸製の鏡や武器などの青銅器が見られるようになります。また、奄美大島や沖縄の珊瑚礁に生息するゴホウラやイモガイという大型の巻貝を加工し貝殻製の腕輪や、新潟県糸魚川産のヒスイなども北部九州地方や近畿地方など西日本の遺跡で発見されています。これらはほとんどが墓の副葬品や特定身分の人々の装飾品であり、威信材の交易がますます盛んになったことが窺えます。」

特定の産地の石材や石器が広い地域に分布する状況は縄文時代にもありましたが、加工度の低い縄文時代の石材流通に比べ、今山産の石斧、立岩産の石包丁は原産地での製品化が高いことが特徴です。同じ時期、近畿地方ではやはり石器の材料となる二上山産サヌカイトの流通圏が成立します。」

ここに紹介したのは、石斧、石包丁など、遺跡から出土する物だけであるが、対馬国のところで見たとくに、奴国の人々は消費財も活発に物々交換していた。

社会の豊かさは、農業生産力だけでなく、その地方では生産できないものがどれだけ得られるかも大きな要因になる。

北部九州は余剰農作物が豊かなため、石斧、石包丁、青銅器などの職人が専業で生計を立てることができたであろう。専業で生産に携われば、生産性が高まるとともに、創意工夫を職人たちが競って行うようになり、品質も高まっていく。集落内、あるいは地域でいろんな仕事を分担し合うという意味での分業制が発展していっただろう。集落内で製品の物々交換を行うだけでなく、他国との交易も行った。彼ら職人たちは農業に携わらなくても必要な食糧や生活物資が十分に得られたであろう。交易が盛んになれば、他国からの来訪者も増え、より豊かになる。王もそうした価値の高い製品との交換で、ヒスイの勾玉や黒曜石の石鏃など、その地で製造できないものを得ることができた。また、集落を守る兵士を多く抱える余裕も生じただろう。現在でも自由貿易は世界経済の発展に寄与しているが、弥生時代においても余剰と不足のバスターは相互に経済的メリットをもたらしていた。

南九州勢が目的とした、そうした経済的な利益を得るという目論見の一つが、武力侵攻という周辺諸国間の信頼関係の破壊によって、大きく外れた。

奴国は、先ほど見たように、朝鮮半島との交易をほぼ独占していた。南九州勢は、戦争によって途絶えた大陸との交易路の回復と、特に戦争で大量に消費した石鏃を主とした鏃^{やじり}の調達に努めただろう。後漢への朝貢が叶わなかったため、奴国が得ていた後漢との良好な関係を引き継ぐことはできなかった。そのため、朝鮮半島との交易の振興を第一に、対馬海峡の航路の独占と、そのための対馬、壱岐の征服を速やかに行なったものと思われる。鏃は敵兵に向けて放たれるので、弓から矢が放たれるとほとんどが回収できなくなる。石鏃の製造も行っただろうが、それだけでは足りないため、朝鮮半島南部から鉄鏃や鉄の素材を大量に調達し、鉄剣も含めて武器を製造し、戦争で大量に消費した軍備の再調達と在庫の積み増しを行なったであろう。朝鮮半島から調達した鉄材は、こうして、南九州勢がおもに武器の製造および自国内で使用する鉄製農具などの製造に優先的に用いたため、周辺諸国は、戦争開始以後、戦争が終わった後も、鉄が調達しにくい状態が続き、鉄製農具などが不足する状態になったであろう。玄界灘沿岸地域の遺跡から鉄器が大量に出てくるが、瀬戸内海沿岸各地方や近畿地方の遺跡からはごくわずかししか出てこない。このことから、玄界灘沿岸地域が鉄資源入手ルートを独占していたと推定されている。

九州を統一した国は、先ほど触れたように、後漢に生口を贈って国交を求めたり、中四国の国々に使節を送り、外交・経済関係の修復に努めただろうが、和国内においては北部九州を侵略し、奴国を滅ぼしたうえに、鉄の供給を大きく減らして武器の製造、軍備の増強に努めたために、不信感を払拭させるまでには至らなかった。逆に、次は我々が侵略のターゲットになるのではないかと疑心暗鬼を生じさせた。外交の無力を実感した南九州の勢力は、周辺諸国との力づくの交易関係の修復、つまり周辺諸国が危惧した武力による解決に乗り出した。